

---

# ジェニユイン・ミラクル～真の奇跡～

媛野

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ジェニユイン・ミラクル〜真の奇跡〜

### 【Nコード】

N0606S

### 【作者名】

媛野

### 【あらすじ】

遺伝子異常から生まれた人間兵機。彼らと彼らを有するものの者が訓練し、また出会ったために集いし場「学園」で、依然パートナーを見つけられずにいるアーリウスのもとに現れたのは、感情を有する欠陥品の兵機だった。それがきっかけで隊の中に不穏な空気が漂いはじめるさなか、隣国と戦争がはじまった。

## 叫び小屋

分厚い本を携えて、青年は図書館の入り口をくぐった。彼が向かった先は閲覧室で、そこには片手で数え足りるほどしか人が座っていない。

彼は適当な席に腰掛け、持っていた本を捲った。

本の題名は『戦闘機具全集第五版』。物騒に思えるが、ここでは普通の教養本として扱われている。

硬い学園の防壁を一步外に出れば、必ず面倒なトラブルが後を付いて回ると時世である。喧嘩や盗み、強奪、略奪なんでもあり。

最近では大敵が今後の戦闘に備えだしたとも聞くようになった。

分厚い本の一頁一頁を丁寧に読み砕きながら、青年・アーリウスは考えていた。

この学園 「戦闘員養育施設履修過程」を略して学園というは、簡単に説明すると能力や才能、努力の功績を認められた者だけが戦闘に必修の知識を蓄えることができる教育専門の施設だ。

この学園の一つ下には入学するに相応しい者を選出するための施設があり、上には学園で身につけた知識や能力をさらに身に染み込ませるための実戦訓練を主とする機関が存在する。

そして以上の機関に合格する絶対条件が、戦闘機と一緒に戦う総合的かつ潜在的な戦闘能力だ。

アーリウスは思わず自分の掌を見つめた。そこには毎日欠かさず行う剣の素振りや稽古で節くれだった手がある。

この学園の理事長の息子というだけで入学できたのではないと証明したくて、自棄になって剣の腕を磨いた。

努力して努力して努力して……今でもまだ、アーリウスを見る目の中には冷たいものもあるが、それ以上にたくさんの仲間恵まれたと思う。たとえ誰もが持つ戦闘機を未だ手にできていなくても、それを認めてくれる仲間がいる。

「隊長」

頁を捲っていると、聞きなれた声がして振り返った。

学園は大抵入学時に隊を組むことから始まる。これは例年通り、学園側で自動的に決められた。アーリウスは第十六隊隊長に、その時決められた。

「理事長が、来て欲しいって」

理事長という言葉を強調させ、ヨセウは視線を下に向けてアーリウスに言った。

長身の彼女は、自然とクルクル巻かれてしまう髪が湿気で盛り上がってしまうのを防ごうと、最近では白い帽子をかぶっている。彼女の隣には、無表情の戦闘機<sup>マリス</sup>が立っていた。

アーリウスはチラリと戦闘機を見、それから本を閉じて立ち上がった。彼はその顔に笑みを浮かべ、ヨセウを仰ぎ見る。

「よし、わかった。じゃあ午後からの特訓は先にみんなを集めてやっておけよ。いつもと同じ手順でな」

「はい、わかりました」

ヨセウは一つ頷くと、マリスの手を取って踵を返した。マリスは抗うことなくヨセウの言う通りに動く。

戦闘機というのは、先天的に武器化転身する感情が一切欠落した人間（のような姿をした者）を指す。こういう存在は周期的に生まれるが、完璧なものは決してないと言われる。

アーリウスは回廊を曲がったヨセウを見送ってからゆっくりと席を立ち、分厚い資料片手に閲覧室を後にした。

理事長　つまり、実父に連れられてアーリウスは旧校舎へとやって来ていた。

辺りは昼だというのに薄暗く、一步踏み出すことに外から吹き込んで積もったであろう砂が擦れてジャリツと音がした。

寒くないのに寒気を感じるような場所だ。こういう場所では、たとえ父親がすぐそこにいても）ヨセウのように戦闘機があれば心強かったかもしれない。

アーリウスは思わず口から漏れそうになった溜息を呑み込んで、気を逸らそうと（本当は嫌だったけど）理事長に話し掛けた。

「ここって、もう使われてないんじゃないかなかったっけ？」

アーリウスは頻りに辺りを気にしながら聞いた。

「事実上は。だがここは色々と活用されているよ、今も」

こいつの事だ、変な生物兵器でも作ってそうだな。

アーリウスの長靴が床上の砂利を擦った。

「最近の十六隊は成績が伸びてきているみたいだな。いい兆候だ」

いまいち理事長の言葉の意味を汲み取れず、アーリウスは片眉を器用に上げて視線を理事長の背中に向けた。

その時突然目の前を歩いていった理事長が足を止め、危ういところでアーリウスはつんのめった状態から普段の姿勢に立て直した。

こういう時、戦闘機が居ればいち早く対応してくれるのだが。

どうしても自分に戦闘機が無いことが悔やまれてならない。

理事長はそんな息子の内情を知ってか知らずか、目の前の古い扉を開けて中に入って行った。

この扉だけは頻繁に使用されているのか、しみができているノブの上に埃は少しも積もっていなかった。

興味深くあたりを見渡していたが、理事長についてくるように促されてアーリウスは平静を装い、ズカズカと暗い部屋に入りながら理事長の背中から目を離さないようにした。

「……ディアナ」

薄暗闇に包まれている部屋に入った理事長は、蝋燭に火を灯すことさえ億劫なのかそのまま闇の中に声をかけた。

ディアナ？ 女の名前だ。

その時アーリウスはいかがわしい考えに辿り着き、ギョツと目をむいて理事長から数歩後退した。

「……お前が考えている事がわかるというのは、たまに悲しい現実を突きつけられた気分になる」

理事長は口端を歪めてアーリウスに言った。

「だが、お前が考えているような事じゃない。ディアナは「理事長は隣に姿を現した白い影をアーリウスの前に押し出しながら言った。「お前の武器だ」

第七訓練塔は別称「叫び小屋」と呼ばれる。何故ならそこは、訓練用の「からくり屋敷」だからだ。

「隊長、遅いつすね」

臉を重そうに何度も瞬きを繰り返すシャークウィッドが、飛んできた小型ナイフを破碎してばやいた。破碎したのはもちろん本人ではなく、彼の戦闘機ゼロヒトだ。影のような動きと正確さで次々と飛び道具を壊していくが、鼻先まで引き上げられた黒いマスクの上に覗く瞳は無感動だ。

シャークウィッドはようやく寝そべっていた場所から立ち上がり、わざと踏み続けていたマス目のスイッチから離れた。すると、今まで雪崩のように刃を向けてきていた飛び道具がピタリとやむ。その後方で、今日何度目かの悲鳴が上がった。

「ん？ ヨセウが来たか？ でもずいぶんかわいい声だったなあ」  
シャークウィッドは反射的にそう言ったものの、頭の中では首を傾げていた。

「叫び小屋」の最上階にある稽古部屋ではヨセウがマリスを使い、

ハナグサと特訓を繰り返しているのを先ほど確認してきたばかりだったからだ。

それなら誰が………？

シャークイッドは考える前にまず行動をとった。

誰か分からないなら確かめてくればいい。

シャークイッドはゼロヒトを連れて次々と飛び出す「叫び小屋」のからくりをかいぐり、最下層へと躍り出た。

次の瞬間、余裕をそのまま顔にしていたシャークイッドの眉が眉間に皺を刻み、叫んでいた。

「ゼロヒト　っ！」

シャークイッドの一声で電流が走ったように空気が引き締まった。

「叫び小屋」の仕掛けてくる攻撃を阻止しながら上ってくるアーリウスの見慣れた姿が見え、何かを背後に庇っている様子で身動きのとれない彼に向かって通路の両壁が口を開け、とつてき投擲武器を浴びせようとしているところだったのだ。

アーリウスは前方から飛んでくる攻撃を払い落としていたが、彼の後について来ている怯えきった少女に向かってきている後方からの攻撃には気づいていないようだった。

シャークイッドがゼロヒトの名前を叫んだ時、まさに少女の胸を貫かんとする仕掛け口から短剣が繰り出されるのが見えたのだ。

上方から飛び出してきたシャークイッドの物凄い剣幕に、アーリウスもようやく事態を飲み込んだようだった。ゼロヒトが人間離れた戦闘機としての動きで少女の方へ飛んでいくが、短剣との射程距離が短すぎる。

間に合わない　っ！

少女の胸を、纏った黒地の制服を突き破るようにして短剣が深く食い込む。刹那、シャークイッドはそれが幻視であったことに気づく。ほっと胸を大きく撫で下ろし、乾いた音を立てて床に落ちた短剣を視界に捕らえ、冷や汗をかきながらそちらを見やった。

どうやら備えられた飛び道具はすべて使い果たしたらしく、「叫

び小屋」からの攻撃はやんでいた。

シン……と辺りが静まりかえった。

アーリウスの背後に立っている少女は、今にも泣き出しそうな顔をしてガタガタと震え、それでも組み合わせた両手を口の前に持つてくると、小さく十字をきった。

シャークイッドはゼロヒトの前に立ち短剣の隣に落ちた分厚い本を拾い上げると、それを泣きじゃくる少女の頭を軽く撫でているアーリウスに渡した。次にゼロヒトの細かい切り傷をひとつひとつ確かめ、小さく「よくやった」と呟くように労う言葉をかけたが、ゼロヒトは光の宿っていない目をまっすぐシャークイッドに向け、一度瞬きをしただけだった。

「その本も、たまには役に立つみたいですね。隊長」

しばらくして、シャークイッドが穴の開いた『戦闘機具全集第五版』を指差しながら言った。

アーリウスは曖昧な表情を浮かべ、困ったように少女を見下ろすと、シャークイッドもつられるようにして小さな姿に視線を落とした。

「っていうか、なんでこんな場所に新入生を連れてくるんすか。さつきみたいなことがあったら危ないじゃないっすか」

シャークイッドが呆れを含んで言った言葉に返ってきたのは、なんと予想に反してアーリウスの溜め息だった。

「まさかと思っただけどさあ……」

アーリウスは意味不明な言葉を残し、とにかく一緒に最上階についてこいとシャークイッドに言った。

シャークイッドはもう一度、涙を流す銀髪の少女を後から注意深く眺めた。

「まさかっ!？」

最上階につくと、今まで特訓を続けていたヨセウとハナグサが少女に目をとめてそれぞれ目を丸くした。

「そんな、まさか!？」

再びハナグサが叫んだ。

「アースがそんな趣味だったなんてー!」

「……怒んねえからそれがどんな趣味だか言ってみろ」

アーリウスは変に据わった目つきでハナグサを見た。すると面白がる表情を隠そうともせず、言っているの? という目つきで逆に見返される。その目の中に異様な輝きを見た気がして、アーリウスは端的に断っておいた。

ハナグサがつまらなそうに口を窄めてブーイングをする。

「つまらないよこのシヨタ隊長」と遠くで聞こえ、プチっと何か音が立てて切れた気がした。

「とにかく、理由<sup>ワケ</sup>を教えてください、隊長うおお!？」

シャークイッドはアーリウスを振り返って、思わず語尾をのばして驚愕した。

視界の端に捉えたアーリウスがハナグサを格闘技でかためている幻を見た気がした。というか、幻であってほしい。

切実なシャークイッドの願いもあってか、戸惑って身動きできずにいたヨセウが武器化させたマリスを振り上げて、二人の仲裁に入ってくれた。

キラリとマリスの長剣が不適に輝く。

普段はおろおろと戸惑うばかりのヨセウにとって、これが精一杯の仲裁方法だったらしい。

第七訓練「塔叫び小屋」に、今日も仲良く悲鳴が木霊した。

## ディアナ

アーリウスは重い教科書を持って教室前の廊下をいつも通り直進していた。

ただそれだけなのに、いつもと様子の違うように思えるのは周りからの視線か？ それとも後を俯き加減でついてくるディアナか？ どちらの可能性も大きいと勝手に結論付け、今にも躓いてこけてしまいそうな隣を駆け足でついてくる少女を見た。

肩にかかった銀髪や今にも泣き出してしまいそうな顔は、昨日とまったく変わっていない。

「こいつの名前はディアナ」

昨日、「叫び小屋」の最上階でアーリウスは眼の下を腫らした問題の少女を紹介した。

ヨセウはアーリウスが理事長に呼ばれていった事を知っているの  
で、何か起こることは予感していたようだ。いつものようにマリ  
スと一緒にあって、静かに耳を傾けていた。

「実は、こいつが俺の戦闘機……らしい」

だからアーリウスの言葉にひどく動揺をみせたのはシャークイツ  
ドとハナグサの二人だった。特にハナグサは、転身を解いた自身の  
戦闘機トウの隣でキーキーと非難の声をあげた。

「アースッ！ 馬鹿だよあんた。そんな瓦礫多をつかまされて！  
ジャンク

誰だ、こんなのをあんたの戦闘機に仕立て上げたのは。アース、言  
ってみろ！！」

ハナグサが怒気を含んだ声で一声喚くたびに、ディアナは肩をビ  
クつかせてどんどん小さくなっていった。ヨセウは黙り、シャーク

イツドも気に食わないが興味はある、と顔に書いて傍観を決め込んでいる。

「あんただって知ってんだろ。武器化転身する人間の三つの条件をさ。」

一、一切の感情欠落

一、先天的に武器化転身する

一、周期的な発生

この三つだ。ひとつでも項目に当てはまらなければ皆、すべてジャンクなんだ！」

「確かに。だけどディアナは感情を兼ね備えて誕生しただけだ。周期上に生まれ、ちゃんと武器化転身できる」

「じゃあここで俺たちに見せてくださいっすよ」

傍観に専念していたシャークイツドが口を挟んだ。アールリウスは背に隠れてしまったディアナを振り返り、難しい顔をする。その表情をハナグサは見逃さなかった。表情を物凄い剣幕にすると、吐き捨てるように言って立ち上がった。

「それはジャンクでそれ以外の何物でもないからっ！アースが今まで戦闘機がないからって、上級生とかに悔しい思いをしてきたのはわかるけど、だからってそんなもの使うことないでしょ！？アースには悪いけど、そのジャンクをどっかに捨ててくるまで、私……この十六隊に参加しないから！」

「おいっ、ハナグサ！！！」

アールリウスが止める暇いとまもなく、ハナグサはトウを乱暴に呼びつけると、最上階層にある唯一の扉から姿を消してしまった。振り返ると、シャークイツドが大袈裟に肩を竦めて見せ、ゼロヒトを連れてハナグサの後を追うように出ていった。後に残ったヨセウは白い帽子を弄りながら、マリスの方を見ていた。

思わず、悪態をついてしまいたくなった。

「どうして、理事長のことを話しに出さなかったのですか？」

不意にヨセウの小さい声が耳に届いたが、その声はディアナのよ

うに怯えているわけではない。ただ率直に、思ったことを口に出したという強い印象を受ける。

「……あ、いや。確かにそれ言えばハナグサも諦めてくれたかもしれないけど、それじゃやっぱだめじゃん？ よくわかんないけど……」

「……確かに、よくわかりませんね」

暫く話を聞いて逡巡していたヨセウが返した言葉に、アーリウスは思わず笑い返した。そして、責任を感じたようにべそをかき出したディアナの小さい肩を抱き寄せて、銀髪を絡めるようにして撫でてやった。

「おーい、ディアナ」

アーリウスは立ち止まり、ビクリと振るえる少女の前に手を伸ばした。

今まで俯いていたディアナの顔が上を向き、それからしばらく差し出された手の意味を考えるように突っ立っていた。

「お前……絶対こけるから掴まれって」

周りの視線を痛いぐらいその体に浴びながら、二人は廊下に立っていた。

俯くディアナ。戦闘機が無くて落ちこぼれのレッテルを貼られているアーリウス。

チクチクと細かい針が体を刺激した。

早くこの場から立ち去れ、という声が頭の中から聞こえてくる。けれどアーリウスは我慢強くその場に立ちつづけ、待っていた。

“本当”の感情を持つ戦闘機のディアナから、差し出した手を握り返されるときを。

「……ありがとう」

今にも消え入りそうな声が聞こえ、気付いた時には血通った細い手が、アーリウスのそれを握り返していた。

学園の隣に建ち、こんにちもその機能を果たしているという旧校舎。

先日、理事長はそこにアーリウスを呼びつけて、通常はジャンク行きになるはずのディアナと引き合わせた。その際、実は彼女がアーリウスの武器であると言ったことの他にも、彼に告げていた事実があった。それを考えると、ハナグサが第十六隊から自主謹慎になつてくれたことは、逆に良かったかもしれない。

目の前に白のワンピースの裾を握り締め、皺をつくつたまま俯いて黙りこくるディアナと対面し、アーリウスは哀れむ視線を向けた。そう、少女ではなく理事長に。

「何言つてんだよ、単に新入生だろ？ 時期が外れてるからって、別に俺の隊に入隊するのに、こんなコソコソしなくていいよ」

「違う。聞け、アーリウス」

理事長の感情を押さえ込んだ否定的な言葉に、アーリウスはムツと目を吊り上げた。

「敵国が動き出したというのは薄々感じていたと思うが、すでに先制部隊は剣を交えている」

「はあっ！？ 何だよそれ！」

そんな話は聞いたことも無いと言いたかったが、思い当たる節もあった。そしてなにより、目の前に立つ男を見てすぐに自分達がこの情報を与えられていない原因を導き出した。

金か武力か権力か、いずれにしろ情報操作を上層部で行い、改竄かいざんしたということだ。

アーリウスは腕を組み、鋭い視線を男のほうに向けた。だが理事

長は少しも気に留めておらず、今度はディアナに目を向けて言った。  
「ディアナはその敵国で生まれた戦闘機だったが、我々のほうで秘密裏に確保した」

遠まわしにはあるが、理事長はディアナを拉致したことを告白した。

アーリウスは開いた口が塞がらなかった。怒りを通り越して呆れかえる。理事長は次を待たずに言葉を続けた。

「この子は戦闘機として完全欠如するはずの感情を持つて生まれた。感情がある故に自在に武器化転身を出来ないが、感情があるが故にできる事もある。学習し、成長できる。敵国は元々戦闘機自体に重きを置かない主義から、彼女の存在価値を知らないだろうが、我々は違う」

薄闇と埃の垂れ込めた室内に、異様な圧迫感を感じた。その時、アーリウスは目の前の男を見て、馬鹿だと思った。

人ひとりさらっておいて、理事長に存在価値うんぬんを語る権利があるはずない。

アーリウスは白く細い少女の手を取ると、くるりと踵を返して部屋を後にしながら彼は理事長に吐き捨てた。

「そんなのテメーらのエゴだろうっ！ ふざけんな！」

実父にこれだけ噛み付いてしまうのは実際どうかと思ったが、あまり重要にも思えなかった。

事実、去り際に振り返ると理事長は口端を吊り上げていたのだから。

戦争だ。混乱と悲惨な血や泥にまみれる明日が来る。ただそれだけで、虚しいものが戦争だ。

アーリウスは怒りに打ち震えながら来た道を、足を踏み鳴らして前へ前へ直進した。

今まで一方的に握っていた手を、そつと握り返されていたことに気づかないほど、激昂していたのだろう。

外に出ると日は既に大きく傾き、赤く鮮やかに輝いていた。

未だに、この事実だけは仲間話を切り出せずにいた。なぜならこれは遊び半分で簡単に片付けていい問題では無いからだ。

ハナグサの自主謹慎は喜ぶべきなのだと、アーリウスは必死になって自身に言い聞かせた。

交戦が本格化し、巨大化したとき、行動はすべて隊ごとに行われる。すると隊から自主謹慎をしているハナグサは、戻ってこない限り戦場に赴くことはできないからだ。

アーリウスは旧校舎から出ると立ち止まり、しばらく瞑想して本来の自分自身を取り戻そうと頭を冷やした。

運んできた学食定食のオムライスをスプーンの手で突つき、それからぱくりと一口頬張った。彼の隣には、じつに物珍しげにオムライスを凝視するディアナが座っている。

それに気づいていたアーリウスは、頭の中で解決策を模索しながらもスプーンでオムライスを大きく掬い取り、瞬きを繰り返す少女の前に持っていた。

肩肘をつき、その上に頬を乗せてぼんやりとディアナの様子を覗いていたが、好奇心を前にして堪え切れなかった少女がスプーンを咥えると、アーリウスは思わずおっ！と目を輝かせて背を伸ばした。

「うまいか？」

戦闘機であるディアナが、食べ物を食べて味を感じるかどうか気になった。

ディアナはコクリと頷き、お皿の上に残ったオムライスに視線を流した。アーリウスは笑いながら、ずいっとお皿を少女の前に押しやった。

「そっか、何て言ったって基礎の体はやっぱり人間だもんね。そう

だよなあ」

と、誰にともなく呟いた。

その時、学園の鐘が鳴った。

この場所が学園となった日から、ずっとその姿を見つづけてきた巨大な鐘が、外の空気を打ち震わせていた。

\* \* \*

海の底に沈んだ太陽が月と替わり、そして再び地平線上に顔を出した。

「今日は戦火において役立つ医療食の実習みたいっすね」

昨日と変わらずゼロヒトを連れ、シャークウィッドが中央校舎の掲示板の前に立った。それから視線を巡らしてアーリウスを見たが、隣にディアナの姿を認めて肩をすくめた。その理由を理解し、アーリウスもまた苦笑をもらす。

実習とはいつでも第七訓練塔で行う実戦や訓練ではなく、今回は医療食の調理実習だ。ここも教育の場。最低限度修得しなければならぬ履修教科がある。

ハナグサは特に医療や医学に力をいれて勉強している。アーリウスは彼女が初めて注射器を手にしてほくそ笑んだとき、絶対にハナグサに命は預けたくないとい心に決めた初々しい過去を持つ。

シャークウィッドと並んで調理室がある階まで上っていくと、途中でヨセウと合流した。

「ハナグサは、やっぱり来ないかもしれないっすね」

シャークイッドの言葉に、アーリウスも否定は出来なかった。

性格が頑固な彼女のことで。シャークイッドの言う事態も十分予想される。

一行は三階調理室にたどり着き、適当な場所を見つけて腰掛けた。壁際には大鍋や壺などが置かれ、怪しい植物が乾燥棚に並べてある。あまり頻繁に来たいとは思わせない場所と雰囲気だ。

授業開始を知らせる合図　夕暮れに鳴る鐘ではなく各部屋に用意されたからくり時計の鐘　が鳴り、白衣に身を包んだ職員が教壇に立つてもハナグサが現れる気配はなかった。

アーリウスの胸に、じりじりとした感情が渦巻く。それに気づいたのか知らないが、隣に座るディアナがじっとその横顔を見つめていた。

各班の卓上に献立の材料が載せられて、始めてくださいという白衣の教員からの合図に応えはしたものの、第十六隊の手だけは誰一人として動かなかった。

「……誰がやる？」

視線を水槽の中で優雅に泳ぎまわる魚に移して、アーリウスが聞いた。

「まかせなさいよっ！」と言っていつも手早く魚をおろしてくれたハナグサはここにはいない。

「え、そりゃ……隊長っしょ？」

苦しそくに顔を歪め、シャークイッドが答えた。ヨセウは卓から数歩離れて見守る体制を整えている。

薄情者っ！　と彼女の頑なな姿勢を見て叫びたくなる。そこを何とか自尊心で押さえこみ、アーリウスはすうっと深呼吸をした。

手にはシャークイッドに手渡された刀身の細長い、今まで持ったこともないような包丁が握られている。

これから水槽に手を入れて魚を掴み取り、その息の根を止め……

「駄目だ！！　俺にはこの罪なき命を殺めることなんて出来ないっ」  
アーリウスが手にしていた包丁を机に叩きつけ、側にあった椅子

を足で引つ掛けてしまった。重力に従って叩きつけられた椅子が凄まじい音と共に床に直撃し、ごろりとその身を横たえる。

しん、と静まりかえる室内で、冷やかな視線を背に受けながら、アーリウスは緊張で深呼吸を何度も繰り返していた。

「あ、アー……ス……」

水を打ったように静まり返る室内に、場違いな、今にも泣き出し、てしまいそうな頼りない声が、項垂れるアーリウスの肩を叩いた。

驚きの表情を浮かべてディアナに穴があくほど見つめたのはアーリウスだけではなかった。シャークイツドや、ヨセウさえも目を見開き、彼女の次の言葉が出るのを息を潜めて待っている。

詳しい事情を知らないその他の学生は再び作業を開始し、教員が転がった椅子を指差して一言「直しなさい」と言ってから彼らの脇を通り過ぎていった。

ただ第十六隊の集まる机の周りだけ、時間が止まったように誰ひとり　口さえ開こうともせず　動かずに、ただ呆然と突っ立っていた。

だがこの状況を何より驚いていたのは、ディアナ本人だったのかもしれない。

彼女はさらりと流れる銀髪の向こう側に、朱色に染めた顔を隠し、それから一言も口を開こうとしなかった。

気まずい空気が垂れ込め始め、このまま動けずに授業時間をめいっばい使ってしまうのかと思われたその時、口を尖らせて口笛を吹きすさびながら、待ちに待ったその人が顔を出した。彼女は大事な授業も眼中にない様子で言い放った。

「アースツ。これからウェルカム・パーティーやるよっ!」

そしてにつこりと黒い目を細めた。

彼女が停止していたぜんまいを何の苦も無く巻き終わらせ、時が再び正常に紡ぎ出されるのがわかった。

一人一人、それぞれに時間は平等に与えられているのに、その時

間を自分のためでは無く、仲間と一緒に過ごしてしまうのは……独りという影に怯えてしまっているからだろうか？

はにかみ、こしょばゆそうに笑みを浮かべたハナグサが、ゆっくりと周りを見渡した。

そして、何か大きな強さを得たように、彼女はいつものように元気良く笑いかけたのだった。

## 歓迎会

睫毛に雪が降り積もる。

口を開けると喉が焼け付くような痛みを覚えるが、それでも彼女は必死になって叫び続けていた。

気温マイナス四〇度の白銀世界があたり一面に広がり、空から絶え間なく白い物が降り積もっていく中、ガタガタと震えながらディアナは泣き叫び、必死に助けを求めている。

目の前には固く戸を閉ざした収容所がそびえ建っている。彼女の他にも五六人の男女が壁際に立っているが、ディアナみたく声を張り上げたりはしていない。

なぜなら皆戦闘機だから。

彼らの目は一点の光もなくどんよりと曇り、その口から吐き出される微かな息遣いだけが彼らが生きていることを証明している。

深い雪の中にディアナはぐったりと倒れこんだ。

収容所には彼らの他にも武器化転身できる人間が収容されているが、その扱いは奴隷かそれ以下のものだった。もともと感情の欠如という点から、奴隷よりも扱い易いからだろうと推測できる。

欠如しているはずの感情を幸運にも持ち合わせて生まれてきたため、ディアナはこの収容所に送られる前まで告知されずに済んでいた。しかし、国立病院で受けた検診で政府に目をつけられ、すぐに収容所で酷使を負う羽目となった。

ガコン、と大きな物が地面に転がり落ちる音を耳にしてディアナは顔を上げた。扉が開かれるのだろうと期待したディアナだったが、次の瞬間呆然とした。

白銀世界に浮きあがった灰色の無数の影に瞳から流れ出る涙も凍ってしまふかと思われた。

眼前にそびえる壁の向こう側には、屋根のある施設の中で暖をとりながら監視員たちは雑談を交わしているのだろう。そして彼らは

ディアナたちの醜態を鼻で笑っているのだろう。

まさかディアナの目と鼻の先に襲撃を狙う反乱分子がいるとは思  
いもせず、今この瞬間にも、きつと笑っているのだ。

一人の男が厚い毛皮の下から二丁の銃を取り出すのを見て、ディ  
アナは恐怖にかられてその場を駆け出した。

何年も変わらず身に纏っている服が雪に濡れて重く、体の動きを  
雪と一緒に鈍らせる。

彼女が走り出した途端、一人の影が素早く反応して後を追いか  
けて来た。振り返るとすぐそばまで覆面が迫ってきている。

ディアナはもう何も考えられず、ただ闇雲に前へ前へと走り続け  
た。

「そこのお前、止まれ！」

次の瞬間がつしりと腕を毛皮でできた手袋に掴まれ、凍傷になり  
かけていた足が降り積もった雪の中から引き上げられていた。ディ  
アナの紫色になった唇が恐怖と寒さで震える。咄嗟に腕の先を武器  
化させ、無言で腕を振るおうとする。生きる為にこの場から逃げ延  
びようと必死だった。

だが抵抗するには体力もなく心も弱りきっていた。それが武器に  
も表れていたのだろう。結局相手を傷つけようとしても刃が脆くて  
歯が立たないのだ。ディアナは悔しさに涙を呑んだ。

もう駄目だ、戦闘機だとばれてしまった。相手に何されるかわか  
らない……。

諦めかけたその時、厳しい寒さから守る物にディアナの体は不意  
に包まれた。それは厚い温もりのこもった狼の毛皮だった。

冷たく凍り始めていた肌に、じわりとその温かさが染み込んでく  
る。

「……もう大丈夫だ」

低い安心感を与える声が温もりの上から降ってきた。

誰だろうと思った。戦闘機に、こんなにも優しくしてくれるのは  
ディアナが先刻まで体中に感じていた恐怖は、今はすっかり体か

ら抜け落ちていた。後からその空いた穴を埋めるように、疲労感が全身を襲う。

ディアナは久しぶりにゆったりとしたまどろみを感じ、凍りかけていた瞼を閉じた。

ひとつの出会いに、永遠の感謝を …。

意識を手放す前に、ディアナは遠くに雪の弾ける音を聞いた。

\* \* \*

瞼を押し上げると、甘い空気の中に丸い一つのホールケーキがテーブルの上に乗っていた。驚いて目を丸めると、一番にアーリオスの嬉しそうな笑みが目に入り、ハナグサの照れくさそうな顔も、ヨセウの真っ直ぐな瞳も、シャーキッドのおちゃらけた表情も、すべてが濃厚な、そして初めて嗅いだクリームの香りに包まれて目の前がぼやけて見えた。その原因が何であるかを知ると、慌てて面を下げ、銀髪の下に隠した。

「ディアナ……その、昨日はごめん」

ハナグサの表情が曇り、ディアナは慌てて顔を上げた。

「部屋に帰って一人で考えて、トウとあんたを重ねてみたらどうだ

ろうつて考えたら、すごい後悔した。私はアースもトウも好きで…  
…ここにいる皆が好きだったから、突然入り込んできたあんに、  
正直戸惑った」

ハナグサは一つ深呼吸をし、まっすぐディアナの目をとらえた。  
授業はハナグサの機転によって、他のグループよりも早く課題を  
終わらせると早々に授業を切り上げた。今は七階の調理室に集まり、  
十六隊以外の人は一人も居なかった。

「十六隊にようこそ     ディアナ」

ハナグサはやっぱり照れ臭そうに右手を差し出して言った。

「もし、私の事を許してくれるなら……握手して、くれるかな？」

今まで知らなかった甘い甘いところける香りが周囲に満ちる。

ディアナは長い銀色の睫毛を何度も上下させ、一も二もなくハナ  
グサの手を握り返した。視線をまわりに向けると、ホッと安堵する  
顔が並んでいた。

ディアナは特に、アールウスを注意深く眺めた。ディアナの視線  
に気づいた彼が、親指を立てて腕を突き出してくる。ディアナから  
それまで消えていた血通った笑みが、この時何の苦もなく浮かび上  
がった。

雪の花が静かに綻ぶような、儚く優しい笑みだった。

「さーて、今日は俺たちもはしゃいじゃおっかな」

室内に笑い声が響く。

白いクリームが乗ったハナグサ特製のホールケーキは均等に分け  
られて配られた。

人も戦闘機も、同じものを食し、お腹の底にあたたかいものを溜め込む。

ここにはディアナの夢見て求めていたものがある。もう、昔は振り返らない。この時彼女は静かにそう誓った。

ディアナは霞んだ目を擦りながら、初めて食べたケーキに舌鼓を打った。

ハナグサは彼女にまたケーキを作ってきてあげると意気込んでいた。それをディアナは嬉しく思いながら、アーリウスのそばに駆け寄った。

「お、どした？」

何も考えず、ただ素直に直球の言葉を向けてくれるアーリウス。彼はディアナが隣りに来ると、すぐに目を細めて彼女の銀髪を乱暴に撫でた。ディアナは背の高いアーリウスを見上げようと視線を上げ、彼は「わかったぞ」と一言言って、手に持っていた赤く熟れた苺を目の前に差し出してきた。

「お前、これが狙いなんだろう？」

甘美な余韻を舌の上に残してくれた苺は確かに美味しかった。思わず差し出された苺を受け取ろうとして身を乗り出したが、アーリウスはひょいっと苺を高い所に持っていく、それを追ってディアナも爪先立った。しかし結局苺はディアナのお腹に収まらず、アーリウスの開いた口の中に消えていった。これを端から見っていたハナグサが、ディアナに気を使って冷蔵庫から大きな苺を取り出してきたが、ディアナはそれを拙い言葉で丁寧に断った。その代わり、仕返しにとアーリウスの小皿に残ったケーキのスポンジ部分を口に咥えた。途端、アーリウスの大袈裟なりアクションが返ってきて、部屋は温かい笑い声に包まれた。

「ほら、ほっぺにクリームがついてんじゃない」

ハナグサはお腹を抱えて笑い転げながらキョトンと立ちつくすデИАナを指差した。

「あ、マジだ」

と、シャークイッド。

「これじゃあ、手のかかるそこらへんの子供と同じだな」

と言いながら、アーリウスは指の腹でデИАナの顔についたクリームを掬い取った。

彼の熱い指先が離れた後も、なぞられた頬は熱を持ったように熱くなり、すぐには忘れられなかった。

守りたい場所、守りたい人。出会えたのは、数億分の一という確率。

あなたに出会えた事は、私の転機。

私はあなたの、武器になりたい。

デИАナはゆつくりと、さっき思い出した笑顔を顔に乗せた。

あなたを私に、守らせてください……アース。

\* \* \*

「随分と早かったようだ」

男は机に頬杖をつき、コツコツと指先で机を叩いた。  
理事長室に設えられた硬く頑丈な一本杉の執務机だ。

「動きはかなり速くてですね、明後日<sup>みょうごにち</sup>には全体が見えるだろうと予想されますね……」

机に頬杖をついて話をする理事長の前に立つのは、分厚い資料と地図を抱えたやつれ顔の男。一見研究者が数日間研究に没頭しすぎて、食事睡眠をし忘れていたという印象を受けるほどその体は痩せていた。

「そうか、明後日か……」

机の上で組み直した手の中に顔を埋めて、理事長は深く溜息をついた。そして請うように眼前に執務机を間に挟んで立つ男を見やる。男はこの視線にしばらく重い沈黙を置いてから答えた。

「残念ですがね、間に合いそうには……無い、かと」

男は一言残すと、地図を手で押さえながら理事長室を後にした。  
後に残された理事長は沈黙を保ち、鉛のように重い瞼を閉じた。

窓の外には丸い月が昇り、誰もが寝静まったところ、巨大な爆発音があたりを震撼させた。

程よいまどろみの中に漂っていたアーリウスはその音に飛び起き、窓の側に駆け寄った。

暗い空のもと、もうもうと立ち上る一つの砂煙が遠くに見える。敵の攻撃かもしれない。

一瞬のうちにアーリウスは状況を悟った。

起きてからはずつと頭が冴え渡り、状況を正確に判断出来たのは良くも悪くも、理事長が前もって彼に事情を話してくれていたからだろう。その事実之苦虫を噛み潰した表情を浮かべたアーリウスは、指定の黒の制服に血色の腕章　隊長の証　を腕につけた。

普段と変わらない素材の制服を着ているはずなのに、腕章一つつけるだけで感じる責任感はぐんと重さを増す。

そのとき、表の扉を乱暴に叩く者が現れた。

「隊長ッ！！　俺っすよ！」

シャークイッドだ。

アーリウスがすぐさま扉を開けて顔を出すと、驚いた事に彼の後ろにはゼロヒトの他にもディアナがついて来ていた。

銀髪を窓から差し込む月明かりに照らして、彼女は不安そうな目をアーリウスに向けた。シャークイッドの視線がチラリと腕に巻かれた赤い腕章にとまり、何かを決意した目をして手短かに状況を説明してくれた。

「敵襲っす。東地区の方に第一発の爆発があり、第二発は十秒後に第三発目も予想され、敵は外壁を乗り越えて侵入してきたみたいです。第一部隊が今、剣で交戦してるっす」

「ハナグサとヨセウは何処だ！」

シャークイッドは後にゼロヒトを従えながら駆け出した。

「二人は後方部隊に回っているはずです。隊長が来るまで大きな行動は出来ないっすから」

「そうか」

アーリウスはホッと息をついた。

「俺は先に二人と合流してるっす！ 隊長も早く来て下さいよ！！」

シャークイッドは飛ぶように駆けるとゼロヒトと共に角を曲がり、柱の影に隠れてその姿はすぐに見えなくなった。

アーリウスは一度部屋に駆け戻り、腰に帯剣ベルトをつけて剣を挿すとディアナの手を引いてシャークイッドの消えたほうとは反対の方向に駆け出した。

転びそうになるディアナの小さい体を支えながら、アーリウスもまた飛ぶように廊下を走り抜けた。だがやっと速度が最高潮に達したとき、向かいから姿を現した男を目にしてその勢いがガクンと落ちた。

アーリウスが手を引いた先で、ディアナが小さな咳きをする。

向かいからやって来た男 理事長もアーリウスの姿に気づいた様子だ。半歩後ろについてきていた学者顔のやつれた男を静止させ、彼もまたその歩みを止めてアーリウスがやって来るのを待った。

「くそっ、知っていたんだなっ！？」

アーリウスの第一声は非難に満ちていた。ディアナの手を、知らない内にきつく握り締める。彼の半歩後ろでディアナの肩が小さく震えた。

「こんなに早かったとは予想外だったが……いずれ来るとは思っていたさ」

アーリウスのすべてを悟りきったような鋭い眼差しが、理事長の向けるそれと交わった。無言の交戦。だが理事長の次の言葉で、アーリウスの中に溢れていた闘志も大きく揺れ動いた。

「ディアナの武器化はできたのか？」

「……」

「……そうか、まだか」

「何が言いたい」

アーリウスは背後にディアナを隠すように横に体をずらした。

理事長とやつれ顔の男が視線を取り交わし、再び理事長が視線を息子に向けた。

「ついて来なさい。もし成功すれば、戦いを終わらせる事ができるかもしれない」

アーリウスが信じられないと目を見張らせ、理事長は踵を返した。その時、外壁を崩される爆音が、大気を振るわせて夜空に響き渡った。

## 宵闇の戦闘

理事長の導きにより、連れて来られたのは学園に残る旧校舎だった。

薫が這う外壁はついこの前ここにやってきた時と変わらず、薄暗い雰囲気を漂わせている。しかし今回はディアナと対面した奥の部屋ではなく、町全体を見下ろせる展望部分だった。

大きく切り抜かれた壁から満点の星空と、赤々と燃え猛る大きな炎を見ることが出来る場所にふたりは連れて来られた。

「怖がる必要は無いですよ」

手に箱を抱えて戻って来たやつれ顔の男が一步踏み出して、ディアナに言う。

重い木戸を閉め、その前に立ち塞がるようにして理事長が扉に背を預けた。

「痛くも何ともない。ただこのバングルを付けて貰いたいだけですからね」

男は言って、手に大事そうに抱えた木箱を開けて見せた。小さく縮こまってしまったディアナの代わりに、厳しい色を隠しきれないアーリウスがその中を覗き込む。

中には大きなオパールが嵌め込まれた美しく滑らかな装飾品の腕輪が、純白の絹に包まれて人の手に付けられる時を待っていた。

「ディアナ」

アーリウスは厳しい目で扉に凭れ掛かる理事長に確認を取ってか

ら、ディアナを振り返った。

少女は大きな瞳でアーリウスを見上げ、細く白い腕を黒い制服の下から何の疑いもなく差し出した。やつれ顔の男が木箱からバンブルを取り出してディアナの腕に取り付けようとする。

刹那、四人の頭上で爆音が夜の深い闇を引き裂いた。

\* \* \*

大勢の人間が激しく押し引きを繰り返し、血を流して怒号が木霊する前線。そこから遠く離れ、一人ひとりがごま粒ほどに見える場所に簡易テントが張られた避難所と救護所があり、そこに第二部隊が列を成して続々と集まっていた。

誰の目にも大きな不安を抱いているのが読み取れる。

「誰か棉を持ってきて！」

「科学室にエタノール液があつたでしょ！？ 棉は予備も持つてきて使って！」

立て続けに起こった爆発に巻き込まれた一般市民がベッドの上に力無く横たわっている。中には胴体から切り離された腕を、一縷の望みをかけて持つてくる者さえいた。

血臭は瞬く間に救護所を満たしていった。

「やべえな」

シャークイッドは手に水桶をぶら提げて呟いた。

目の前には肩身を寄せて縮こまる避難民と、駆けずり回る救護部隊の姿がある。

一般の住民街は学園より南下し、末広に位置している。

爆発はその住民街を取り囲む強固な防護壁を破壊する目的で放たれたものだった。

今は全く静かではあるが、前戦となればそうもいかない。

シャークイッドは滾る<sup>たぎ</sup>る血を抑えるも、目に宿る眼光が鋭くなってしまうのを隠し切れないでいた。

「……あの、働いてください」

控えめな声が呆然と立ちすくんでいたシャークイッドの肩にかかった。

マリスにぴったりと寄り添って、工具箱やどこかその辺からかき集めて来た布切れを抱え込んだヨセウがいつものようにおさまりの悪い髪の毛を帽子の下に隠して立っていた。

「はいはい」と

シャークイッドは大きく肩を竦めて見せ、改めて周りを見渡した。それから手元の水桶を見やって、大袈裟に溜息をつく。

「俺は戦場でこそ花咲く男なんすよ？　ここで水汲みしかできないのって、男として廃るっていうか」

「そんなに早く戦場で散りたいのですか？」

「ヨセウには建前とか、気使いつてないんすか？　っていうか、隊長は何してるんっす！　俺はこんなところで遅咲き……いや、このまま枯れちゃうかもしれないのっ！」

「……そんなどうでも良い愚痴に、私を巻き込まないでください」

ヨセウは一言でシャークイッドを一蹴すると、マリスを連れて踵を返そうとした。

「……そうでした。言い忘れていましたが、ハナグサが呼んでいますよ」

「は？ 俺を？」

「ええ」ヨセウはシャークイッドと並ぶと、薄く白い歯を見せるようにして口を開いた。

「早く水を持って来ないので、ご立腹の様子でした」

彼女は言うど、ふと視線を他へ向けて呟くように言った。

「そういえば、ゼロヒトの姿が見えません……」

そして、キヨロキヨロと人ごみの中を捜すフリをする。

背の高いヨセウでも見つけれなかったようだ。暫らくすると不安そうな目をして振り返った。その物言いたげな目を見て、シャークイッドは全てを察した。

戦闘機に感情は備わっていない。その為、自分が置かれた状況は戦闘時以外では把握する能力が極めて乏しい。戦闘機と使い手の関係もその点を踏まえると、使い手からの一方通行である。

使い手の性格に見合った武器。その細く薄い関係が両者を繋ぐ糸となる。それは、感情の交じる確固とした絆からは程遠いものであるのが現実だ。

「……大丈夫です。ゼロヒトは俺の戦闘機です。俺が、絶対見つけ

て来るんで」

シャークイッドは桶の中で揺れる水を見た。

「早く、見つけてあげて」

ヨセウに気遣うような声をかけられた。

「そうよ、ゼロヒトがかわいそうじゃん」

「うわっ、ハナグサ！？ いつの間に」

「いつの間に？ ついさっきよ」

水の件で気まずそうに視線を遠くに向けるシャークイッドを見上げて、ハナグサは笑った。それから目元を鋭くして口を開く。

「あんまり遅いから来ちゃったし。もういいから、早くゼロヒトを迎えにいつてあげなさいよ。アホ、怠け者」

「……軽く傷ついたぞ」

シャークイッドは軽くよろめき、空を仰いだ。その間にハナグサは医務専攻の先輩に呼ばれ、なみなみと水の入った桶を持って救護所へ戻っていった。ヨセウも軽く頭を下げ、マリスと共に人ごみの中へ消えていく。

後に残されたシャークイッドは、鋭い眼光をして旧校舎の最上階を睨みあげた。次の瞬間 爆発が上空で起こった。

爆撃の砂煙に巻かれ、咳き込みながらアーリウスは目を眇めて見上げた。

爆発の余波から細かいレンガの破片などが撒き落ちてくる。

「アース！」

「ディアナ！？」

爆発前まで背後に庇っていたはずのディアナの叫び声が、頭上から降り注いできた。

アーリウスが声のしたほうを振り返ると、旧校舎の壁が一部崩壊しているのが見える。

凄まじい音を立ててレンガが雪崩れ落ち、地上からは大勢の悲鳴が木霊して聞こえてきた。

彼は舌打ちをして足に力をこめる。落ち着き始めた砂塵の下に伸びている二つの影を確認すると、彼は夜気の垂れ込む屋上へと跳躍した。

視界の悪い場所から周りの風景が一気に鮮明になり、と同時に首に腕を巻かれて拘束されるディアナの姿もすぐに見つかった。

アーリウスは屋根に飛び乗ると、ディアナの背後に立つ男の影を睨み付けた。

月光に照らされて黒々と浮き上がったその姿は、牙を剥いたコウモリの姿を思わせた。

先ほどとは一転し、アーリウスは苦しそうに顔を歪めながらやっとの思いで言葉を吐き出した。

「……ディアナから手を離してやってくれ」

月光の下、艶やかな金髪が細い線を描いて流れる。  
名前を呟くとき、アーリウスの声に影が差した。

「ゼロヒト」

次の瞬間ディアナの顔から血の気が引き、彼女は首を捻って男の顔を振り返り見た。

ディアナの目に映った青年は、やはり彼女の見知った顔をしていた。

「ど……うし、て？」

途切れ途切れになる言葉を紡ぐ少女に、青年は無表情に答えた。

「陛下がお待ちです。ディアナ　いや、如来にやうらいひつじやう比ひ如じ」

「ゼロヒト……？」

ディアナとアーリウスの声が重なった。

ゼロヒトはディアナを捕らえる腕に力を込めると、指先の一部を武器化させて半歩後退した。ナイフのように鋭利な刃を備えた彼の腕が月明かりの下、仄かな青白い光に包まれる。

今にもディアナの首を切断してしまいそうな鋭利な刃物を前に、アーリウスは動きを封じられて歯噛みした。

その時、小さなつむじ風が沸き起こったかと思うと、砂埃に埋もれた部屋の扉が蹴り破られた。新たな敵襲かと身構えたアーリウスの目に、肩を大きく上下しているシャークウィッドが映り込み、彼は思わず天を仰いだ。

「ディアナを離せ、ゼロヒトッ！」

高々と跳躍し、闇夜に弧を描き屋根に着地するとシャーククイッドは開口一番に怒鳴った。ゼロヒトの様子を見ると、彼はさらに半歩後退し、表情は鉄板のように硬く無表情を保ったままである。

アーリウスが怒気を滲ませて一歩足を踏み出したところで、ゼロヒトは鋼色に光る鋭利な刃物をグツとディアナの細い首筋に押し当てた。

「やめろ、手を離せよゼロヒトッ！ さっきから何してんだよ！ マジでわけわかんねえし。ディアナが必要だっつておいて殺そうとすんな！」

アーリウスが叫ぶと同時に、構えていたシャーククイッドが前方に躍り出た。

自慢の瞬発力と足の頑丈さを利用し、靴の踵に仕込んでいたダートをゼロヒトの足へと向ける。通常より何倍も速さを増した凶器は真っ直ぐにゼロヒトの左足へと向かった。しかし、ゼロヒトの武器化された足に軽々と弾き飛ばされ、硬質な音を立ててダートは近くの屋根に突き刺さる。

第二発目を打ち込もうとシャーククイッドが足を振り上げた。軌道は絶対に外さない自信があるし、相手の動きは長年連れ添ってきたパートナーということもあって熟知している。だがそれは、相手にとっても同じことだった。

ゼロヒトはディアナを屋根の端に突き飛ばし、シャーククイッドと同じように跳躍すると両腕を肩から指先にかけて刃物に変化させた。シャーククイッドが腹を決めた様子で迎撃に備えていると、一瞬、ゼロヒトを見失う。

シャーククイッドが冷たい月を背にして、一刻も早く姿を捉えようと辺りを見回している間に彼の背後で血飛沫が飛んだ。

屋根の隅に転がされていたディアナの目が、大きく見開かれる。

シャークイッドより少し離れたところで、袈裟懸けに切り傷を負ったアーリウスがゼロヒトの剣を受けていた。

剣を受けた衝撃で口の中を切ったのか、赤い血を口の端から流しているのが見える。

アーリウスは次々と繰り出される重い攻撃に剣でなんとか返してはいるものの、相手の一振りを受けることにその身が沈み、体力的に不利であるのは端から見ても明らかだった。

ゼロヒトはシャークイッドが背後をとろうとするたびにうまくかわされ、ゼロヒトとはアーリウスを挟んだ向かいに立っていた。

この状況下でダートを投げるのは、あまりにリスクが高すぎる。

「そうか、アイツにとって俺はディアナより大きな欠点になるわけだな」

すべてを察したアーリウスがゼロヒトに向かって皮肉な笑みを見せた。

「そうです」

無表情にゼロヒトは答えると、両刀を振るった。耳障りな金属音があたりに響き、折れた刃が瓦礫の上に転がり落ちた。

「アーリースーッ！！！」

ディアナの絶叫が、辺りに立ち込める夜気を切り裂いた。ぐらぐらと視界が揺れる。

アーリウスの体は血沫を滴らせながら、ディアナの眼前で屋上から消えた。

ドサツという音と瓦礫がかち合わさり鳴り、砂塵が舞った。

ゼロヒトは無表情のまま、瓦礫に覆われた展望部分に倒れる血ま

みれのアーリウスを見下ろしていた。

「あ、アース……」

大きな瞳に涙を浮かべ、ディアナが這うようにして屋根に大きく開いた穴を覗き込んだ。

その時、倒れ伏したアーリウスを見下ろしていたゼロヒトに風受けのついたダートが飛んだ。

それをゼロヒトはハエを落とすように武器化した腕で叩き落とし、肩を怒らせて目を血走らせたパートナーをいつもと寸分も変わらない様子で振り返った。

「もう許さねえッ！　ゼロヒトおおおおー！！！」

シャークイッドが大きく跳躍し、それぞれの剣が激しく打ち合わされた。

## 静寂

ディアナは溢れ出る涙を何の躊躇いもなく自分の手の甲に落とし、  
てうめいた。

胸の奥が燃えるように熱く、心臓が悲鳴をあげている。

汚れたアーリウスの手の甲に涙が吸い込まれる。その手をディアナはぎゅっと強く握り締めた。

「……ディ……ア……な……」

「アースッ！」

微かではあるが、息を吐くようなその声にディアナは面をあげ、  
アーリウスを真っ直ぐに見つめた。

彼女の背後では激しい切り合いが展開され、ついたり離れたりを目にもとまらぬ速さで繰り返して剣を交えている。ディアナはそこから切り離された世界を自分の中に作り出して完全に外界との音を遮断していたが、アーリウスの声を聞き取るのには苦労した。

ディアナは無意識のうちに薄く目を開くアーリウスに手を突き出して、身を乗り出した。

「ごめんなさいっ。私、私が　ッ！」

武器化転身できないために、アースは傷ついてしまった。

「そんなん、かまわねえよ……気に、すんな」

アーリウスは焦点の合っていない視線をディアナに向けた。  
きゅうつと胸の締まる思いがして、ディアナは熱くなった息をゆつくりと吐き出した。

胸の奥が熱い。

「あなたを、守りたかったの……」

「そっ……か……」

アーリウスは血で汚れた顔に笑みを浮かべた。その体からは血が止まることなく、周囲を赤く染めていく。

「アース。私は、貴方の武器であっていい？ 私は、あなたの側にいたい。だから」

生まれてきて初めて出来た“私の場所”は

「だから貴方の為に、私の命を捧げます」  
ちから

貴方の存在であり、それを絶対に失いたくない。

既に瞼を閉じたアーリウスに、自分の言葉が届いていることを願いながら、デアアナは小さく咳き込んだ。それからすぐ地に足がつかない不安定な浮遊感に包まれ、視界が霞んだ。

今まで激しく剣を交えていたゼロヒトが一瞬隙を見せたために、シャークイッドに切り込まれた。

じわりと破れた服に滲み出る赤い血。

ゼロヒトはやはり無表情のままシャークイッドとの間合いをつめると、硬質化させた腕で首筋に打撃を加えた。

「ゼロ、ヒト……？」

全身から力が抜けたシャークイッドが、がつくりと地面に両膝をつくが、ゼロヒトの視線はまっすぐディアナへ向けられていた。

「やっと、始まったのか」

「何が……始まったって？」

シャークイッドが全身に痺れを感じながら聞き返すと、ゼロヒトは振り返らずに告げた。

「覚醒。これでバングルを装着することができる」

「バングル……？」

朦朧とした意識の中、うまく回らない舌を駆使してなんとか聞き返した。

「超小型エネルギー抽出放射装置」

シャークイッドが続きを聞こうと口を開いたが、その時には既にゼロヒトの姿はディアナの側にあった。

先ほどからうずくまっていたまま動こうとしない少女の腕に、ゼロヒトが例の腕輪を装着させる。遠い目をしたゼロヒトの姿がそこにあった。

\* \* \*

「う……ごほっ、ごほっ」

やつのことで降り積もった瓦礫を押し退け、外に出るとあたりは異様な静けさに包まれていた。

「学園長！ ご無事ですか」

「平気だ。それより……」

理事長は服についた埃を払いながら学者顔の男の前に立ち、動きを止めると、

「アーリウス！？」

血糊を貼り付けて倒れる息子の姿に、理事長は顔色を変えて駆け寄った。

「いったい、何があつたんだ！」

呆然と立ち尽くす男を振り返って事情を聞き出そうとするが、相手もさっぱりわかっていない様子だった。

「そうだ、街は……敵国の襲撃はどうなっているっ！」

「外に出てみましょう。ここから上にあがれそうです」

男が瓦礫の山を指差し、その上に開いた大きな穴を見た。それは爆発でできたもので、アーリウスが落ちてきた穴でもあった。しかし、アーリウスについていたはずのディアナとゼロヒトの姿はない。

理事長は所々破けたスーツの上着を丸めてアーリウスの首下に差し入れると、さっそく穴にしがみついて外に出ようとする学者顔の男を手伝って、瓦礫の山を登った。

外は暗かったが、星はもう輝いていなかった。

屋上へ出た二人は驚愕を隠し切れないまま、あたりを見渡した。

「いったい、どういうことなんだ。敵国の軍が撤退を始めている……」

男の言葉を聞いた理事長は、あたりを見渡して何かを悟ったように呟いた。

「そうか……」

「あつ、理事長！ 学園の生徒が気絶してますよっ」

男の焦燥感のある声に急かされて、理事長も振り返った。

「……ってエ……ん、あれ？ 理事長じゃないっすか」

「シャークイッド君。いったい、どうしたんだい」

足早に近づき、傷を診てから理事長はシャークイッドの顔を覗き込んだ。途端、顔色を悪くするシャークイッドの様子に理事長と男がそろって顔を見合わせた。

シャークイッドは顔を曇らせたまま重い口を開き、ここであったことを何一つ隠さずにすべて話した。ゼロヒトに関することになると、悔しそうに手を硬く握り締めて。

説明し終えて、シャークイッドはふとある事が頭を掠めた。

それはまだ誰もが学園に入ったばかりの頃に、ハナグサの部屋に訪れた時のことである。

つい長時間二人で話し込んでしまい、日も傾き始めた頃にようや

く腰をあげて部屋から引き上げようとしたその時、ハナグサがポツリと呟いた。

「あれ？ この本片付けたと思ったのに……」

と言って、彼女が手に取ったのは分厚い最新の医学書だった。当時はあまり気に留めなかったが、今も何故か頭の隅に残っていた。

「そういえば戦闘機って、病気にかかるんすか？」

今更のように気になって聞いてみると、学者顔の男が答えた。

「一応肉体をもった人間の変異種が戦闘機という定義だから、通常より耐性はあるけれど、病にかかる事もあるね」

この答えに理事長が口を挟んだ。

「いや、シャークイッド君の話では、ゼロヒトは言葉を操っていたそうだね。すると、別の見解ができる」

「別の、見解？」

「ディアナの事を思い出してくれ。彼女は生まれながらに感情を持ち合わせて生まれた特殊な例だが、ゼロヒトも同じように考えられる」

「まさか、あいつは感情を……？」

「そうだ。ディアナとまったく同じとは考えられないけれど、可能性はある。それにこの戦争もその事実がいくらか関係していると私は考えているんだ」

思いもよらない理事長の言葉に、シャークイッドは思わず息を飲んだ。

「近年になって分かってきたことなのだが、健常者の体質が戦闘機へと変化し、さらに感情欠落がある段階から激しく起こる病気が存在していたのだよ」

「それと今回の戦争が、どう関係してるんすか」

「それはね。その病気に隣国の王太子殿下がかかっているという噂が実はあったんだよ。王太子殿下の名はフランセルといって、隣国の陛下が彼を特に愛でていたらしいが、日に日に言葉と表情を亡くしていく殿下の姿を見て、陛下は非常に嘆いたそうだよ。そしてまた、悲しみによって周りが見えなくなってしまう、人民を虐げる政治を行うようになってしまった。国状は悪化の一步を辿り、遂に陛下の悲しみの矛先は国中の戦闘機に集中して、彼らを酷使させるようになったんだ……私はその国状を確かめるために調査員を編成して向かったのだが、そこでディアナと出会った」

理事長は遠い地に思いを馳せ、瞼を閉じた。

「今回の襲撃はディアナの存在に気づいた国王によるものだ。たぶん、戦闘機でありながら感情を保有する彼女の存在が、王太子殿下に再び感情を取り戻させる鍵になると考えてことだろう。だから“如来比如” 仏と同様の力を持つ者 と呼んだのだろうね」

「ちょ、待ってくださいよ。そのニョライヒジョって言ったのはゼロヒトなんすよ!? まるで、ゼロヒトがその……敵国の人間みたいな」

「悲しい事だが、君の推測はおおかた外れではないだろうね……」

明らかに衝撃と動揺を隠しきれないシャークイッドに、理事長は苦笑を浮かべた。遠くに燃える戦火のあとを見ると、くすぶった煙が細く空に伸びてたなびいていた。

「理事長。ゼロヒトの言っていた“超小型エネルギー抽出放射装置”ってなんすか？」

シャークイッドが思い出したようにつぶやいた。

脇に並び立っていた理事長は難しく顔を引き吊らせると、シャークイッドの強い要望もあって諦めて白状した。

「例の陛下が造らせた代物しろものだよ」

「それを使うと？ 抽出放射器ってことは、かなりの攻撃力を引き出せるってことっすよね」

今までになく興味津々な様子で、少し元気を取り戻したシャークイッドが振り返った。しかし理事長は彼の向けてきた表情とは相反して、苦虫を噛み潰すような顔をして言った。

「違うんだ。ディアナは攻撃系の戦闘機ではない。治癒もしくは防御といったらいいのかな……彼女は戦闘機でありながら、戦闘機を救う存在なのだ。“超小型エネルギー抽出放射装置”というのは本来覚醒できなかった戦闘機に対して、人為的に行う覚醒装置なんだ」「戦闘機を……救う。それじゃあ、やっぱりディアナは！」

シャークイッドが期待を込めた目で理事長を見た。

「しかし、代償が大きすぎた……！」

突然、理事長が頭を大きく振って唸るように言葉を発した。その声の大きさにビクリと肩を震わせると、シャークイッドは心配そうに隣を振り返った。理事長の眼の下に薄っすらと隈ができている。すぐ目の前に開いた大きな穴の向こうにある、ぱっくり開いた扉を見つめたまま、理事長が次の言葉を慎重に声に乗せた。

「ディアナは体調不良のままで、術をするにもただでさえ限度があるというのに、その状態で発動したら彼女の体の方が耐えられない」

それはつまり何だと言いたいのか。問い掛けるようにシャーキッドは理事長を食い入る様に見つめ続けた。

この目の前にいる人は本当に自分の知っている『理事長』なのかどうか、一度確認を取らなければ不安になってしまうほど、その姿は明らかに動揺し、取り乱していた。

「彼女には自然的覚醒をしてもらおうと、息子をパートナーとしてつけたが……まさかこの短期間で二人の間に絆が生まれるとは思ってもいなかった」

それから理事長は一言も言葉を口にする事無く、呆然と屋上に立ち尽くした。

国家間の戦争を引き起こす発端を、自らつくってしまった理事長の調査団派遣という決断。そして、ディアナの覚醒後の力を予測し、隣国の王太子殿下フランセルの病を治癒して戦争を事前に食い止めるようとした彼の良心的作戦が、結果として大きな悲劇を生んでしまう事になってしまった。

シャーキッドは何も答えられず、俯き加減のまま唾を飲み下した。

理事長とシャーキッドが暫く沈黙を保っていると、背後で裏返った男の声が上あがった。

「アーリウス！」

身構えたシャーキッドの前に、折れた剣を学者顔の男に突きつけたアーリウスの血まみれた姿があった。青白い顔をして、足元に

血の固まった唾を吐く。それから燃えるような視線を彼は理事長に向けた。

「ディアナをどこにやったんだ、クソ親父ッ！」

「剣をしまいなさい、アーリウス。私が気づいた時にはもう彼女は居なかったよ」

「……っざけんな！ テメエのことなんか信用できるか！」

「ホントっすよ、隊長。ディアナは、ゼロヒトが連れ去ったと思うっす……… すいません」

暗く重い空気が辺りを取り巻いた。アーリウスは興味を無くしたように学者顔の男を突き放し、折れた剣を忌々しそうに手放した。シャークイッドは複雑な表情を浮かべて沈黙する。

「くそっ！」

「どこ行くんだ、アーリウス！」

アーリウスは力任せに腕についた真紅の腕章を引き千切り、か殴り捨てると旧校舎の薄闇の中へ吸い込まれるように消えて行った。薄っすらと、空が次第に明けはじめる。

消えたアーリウスの後ろ姿を見つめていたシャークイッドが、視線を手元に落とした。

握り締めて白くなつた掌に、気づいた時には暖かい光が舞い降りていた。

## パートナー

黄砂が辺りを覆い尽くす荒地に、二つの影が降り立った。正確にいうと、一人の青年が抱えていた少女を崖の上に降ろした。

ひび割れた大地に降ろされた少女は強く目を瞑り、硬く両手を握り締めていた。

意識はあるようだ。瞼の裏で眼球が頻りに動いている。

「国境だ……」

直立不動のまま、青年が口を開いた。

ゼロヒトは艶やかな頭髮を風になびかせると、目線だけを少女のバングルに向けた。

嵌め込まれた金属や宝石類が重そうに輝くそれは、高エネルギーの集中により光の粒子を飛散させて瞬いている。その輝きを眩しうに目を細めて見やると、ゼロヒトは再び口を開いた。

「何をするかわかっているはずだ」

一言一言、確かめるようにゼロヒトは言葉を紡いだ。

戦闘機として生まれてきた者が背負う宿命 本能。

ディアナの丸まっていた体から、力が徐々に抜けていくのが見ていてもわかった。閉ざされていた瞼が開き、そこから一筋の涙が伝い落ちる。涙を溜め込んで揺れる瞳で、彼女はゼロヒトを振り仰いだ。

「この先に、私が生まれた故郷が、ある……とても、綺麗なところ、なのに……」

ディアナの向けてくる視線を、ゼロヒトは真っ向から受け取った。

「だが今は違う」

「あなたは、何が…望み？」

「すべてを終わらせる。それが陛下や民のためだ」

目を細めて遠くを見やったゼロヒトに、ディアナは大きく息を吸い込んだ。

「……あなたはまるで、陛下を知っている、みたい」

二人の視線が交錯し、磁石の対極のように反発した。

ゼロヒトの沈黙をどう受け取ったのか。ディアナは気にした素振りを見せずに無言のまま瞼を閉ざした。

バングルから発せられている微量の粒子が次々と伝播<sup>でんぱ</sup>し、瞬き始めた。何とか起き上がるうとするディアナに手を貸した。

通常の人間より遥かに超越した身体能力と組織をもって生まれてくる戦闘機は、感情の欠落という代償に本能を特化させている。

大抵ジャンクと呼ばれる戦闘機は、その本能が退化しているか、覚醒していないものを指す。ジャンクに振り分けられた中には、覚醒を促すパートナーを得て解決することもある。

また、戦闘機ごとに覚醒後の能力というのは多岐に分かれる。

戦闘機はすべてを本能で悟っているというが、彼らの感情は欠けているのでそれも今までは想像の範疇で話だった。

しかしこの場にいるディアナとゼロヒトも、これから何が起こるのか分かっていた。

体をゼロヒトに力強く支えられて、ディアナは重く脇にぶらさがっていたバングルを嵌めた腕を、目の高さまで持ち上げた。

「アースに、永久<sup>とわ</sup>の忠誠を」

ディアナが掠れた、しかし力強い声ではつきり言うと、ゼロヒトは重々しく頷いた。

「その言葉、忘れるな」

壁の向こうでゼロヒトが答えた。

体から何時の間にか平均感覚というものが無くなり、バングルを嵌めた腕は垂れ下がって体は支えのゼロヒトに寄り縋る形となっていた。しかし、バングルの発光はますます大きくなる。

アース……

今ではもう、睫毛の一本一本が重くて仕方がない。

気付かないうちにディアナの周りは白い光に巻き込まれて見通しが利かなくなっていた。微かだが、肩に人肌の温もりを感じられる。

忘れないで……

ディアナが大きく息を吸い込んだ瞬間、彼女の周りを張り巡らしていた壁が砕け散った。

虹色に輝く光の柱が、まだ夜の帳とちもあけきつていない空を貫く。

ピリピリと全身の筋肉が痙攣し、激しい嘔吐と眩暈に襲われた。

現実から逃れようときつく瞑った瞼の裏から、ふと、誰かが目の前に立った気がした。

「ほら、ごらんなさい」

暖炉にくべられた薪が赤々と燃え、室内を暖かく照らし出す。その隅で、ボロボロの布切れを大事そうに抱えた母親の姿があった。

ディアナは一生懸命背伸びをして、布切れのに包まれた中を見ようとした。

「ほら」

再び母親は言っ、腰を少し屈めて中を見せてくれた。  
とても小さな四肢をした、赤子がすやすやと寝息をたてていた。

「母さんのお腹から生まれてきたのよ。びっくりよねえ……」

「おかあさん。つかれたの。……とってもねむたい」

「あらそう？　じゃあもう遅いし、たくさんお眠りなさい」

母親が目を細めて笑うと、器用に片腕で赤子を抱いて、空いた温かい手でディアナの頬を撫でた。

そして明日、またいっぱい笑いましょうね。

おかあさん……

「ディアナ！！」

\* \* \*

光が大空に一線引くと、瞬く間に周囲にキラリキラリとした光が舞い降りてきた。それは人と人、国と国の境など関係なく、一面に降り注いだ。

一人また一人と顔を上げ、誰もが不思議そうに空を仰いだ。

肌にあたっても暖かさや冷たさを感じさせない不思議な光の雨。

それは一瞬でやんでしまった。

緊急警戒措置が解かれ、外傷を負った人の手当てなど一段落ついた救護所でも同じだった。誰もがその一瞬のあいだ手を止めて空を見つめるさまは、心ここに在らずといった言葉がよく似合った。

手に縫合用の糸と洗い直したタオルを持って運ぼうとしていたハナグサは、伸び上がる一本の光線を見た瞬間、思わず息を呑んだ。すぐ傍にいたトウの血通った温かい手を、無意識のうちに握り締め、再び我に返ったのは近くでヨセウの呼び止める声を聞いてからだ。今まで聞いたことなかった彼女の激しい声に驚いて振り返ると、人々が棒になって立ち尽くす間を割って駆けてくる見慣れた姿があった。

「アース!？」

ハナグサはこの日初めて目にする隊長アーリウスの姿を捉え、声をあげた。しかし、ハナグサが驚いたのはそれだけではなかった。

アーリウスの全身に負った切り傷と、尋常でない彼の感情の激流を映した眼差しを見て、ただならぬものを感じ取った。

ヨセウとハナグサの制止も振り切って、アーリウスは今まで戦闘の起きていたふもとに向かって飛び出していった。

「ちょっと、いったい何がどうしたっていうの!? あ、シャーク イットまで!」

空に伸びていた一本の光線がそこに吸い込まれるようにして消え、代わりに冷たくも温かくもない雪のような白い光が、ちらほらと地上に舞い落ちた。

「いったい」

ハナグサは言いかけた言葉を、不意にトウの手に力が籠った気がして、そっと飲み込んだ。

振り返ると、感情がないはずのトウの目から涙が零れている。

ハナグサは驚き、顔を涙で歪めると喜びをあらわにしてトウの厚い胸に飛び込み、強く抱きしめた。

朝日が天に昇り、柔らかな陽光が照らしだす。

すぐに、歓喜の声と表情を湛える人々によってあたりが包まれた。

\* \* \*

体力の限界を感じながら、アーリウスは走っていた。ディアナがどこにいるかなど、皆目検討もつかないで。

胸の奥が今まで感じたこともない不安に疼き、鈍く痛む。

いつのまにか降っていた白い光も止み、ただ辺りには黄砂が舞っている。その中に一つ、周囲からは一線画された場所があった。見つけた瞬間、アーリウスの抱いていた不安が爆発した。

「ディアナ!!」

黄色い地面が白くなってわずかに発光して見えるのは、まだバングルがエネルギーを完全に収拾しきれていないからだ。その中央には、ゼロヒトに寄りかかるように目を硬く閉じるディアナの姿があ

った。

ぐったりと力無く首を垂れている様子は、アーリウスに否応無しにある事を連想させる。

「起きろ。お願いだ、目を覚ましてくれ」

足元がおぼつかないまま、前進をする。

肩の下に誰かの支えがあるのを感じて脇を見ると、後から追いついたシャークイッドが腕を回して体を支えてくれていた。

遠くに立つゼロヒトが、二人に視線を向けた。

アーリウスは思わず身構えたが、シャークイッドとゼロヒトは普段と同じように真っ向から向かい合っていた。

「ディアナは、どうなったんすか？」

アーリウスの一番気にしていた点を、シャークイッドが単刀直入に切り込んだ。

握りこんだアーリウスの手に、血が浮かぶ。まさかと思いながら、頭の中では耳に挟んでしまった理事長の言葉が繰り返された。

「彼女は、死んだ」

一瞬気が遠くなるが、シャークイッドの肩に力が入るのを感じて何とか持ち直す。今にも地面に崩れ落ちそうになるのをシャークイッドが力強く支えてくれた。

一步、一步と、前に向かって歩みを進める。

「俺は……お前と会えてよかったっすよ、ゼロヒト。後悔はしてないっす」

彼の手がこもった。アーリウスはシャークイッドを振り返った。

「だから、これ以上お前と戦わせないでくれ。自主投降するっす…ゼロヒト」

言葉の節々から、彼の切実な思いが伝わってきた。

アーリウスはシャークイッドの助けを借りずに立つと、まっすぐにディアナを見つめた。

シャークイッドがタコのできてゴツゴツとした手を差し出すと、ゼロヒトは顔を持ち上げて空いた掌をその手に近づけた。

次の瞬間、シャークイッドがハツとした様子で目を瞬かせた。

（何でだ。またお前は、俺を裏切るんすか……？）

ゼロヒトの目に、光が宿るのが見えた。

真一文字に結ばれていたゼロヒトの唇が微かに動いて、瞳が鮮やかな感情を映して揺れていた。

シャークイッドは望んでいたものの代わりに手渡されたディアナを抱き取りながら、呆然と宙に身を躍らせたパートナーの姿を見つめていた。

先の一瞬の内に、ゼロヒトは差し出された手を突っぱねると、ディアナの体を押し付けたのだ。

シャークイッドは重力に従って下へと落ちていく彼の姿を想像した。

アーリウスとシャークイッドが我に返って駆け付けた時には、ゼロヒトの体は細かい粒子になり、金色の光が辺りを彩っているかのようにして消えていった。

シャークイッドが手の届かないものを掴むように空を捕らえて握り締めた。

とめど無く溢れ出る涙を乱暴に拭い、そして声を大にして伝えきれないものを伝えるためにパートナーの名前を叫んだ。

「ゼロヒトおおー！！！」

力の限り叫んだ彼の声が、大気を震わした。

パートナーとしてだけでは無く、最高のライバルとして大きな存在だった。今は、ただぼっかりと虚しく穴があいている。この穴を塞いでくれる人は、もう……いない。

後に残るのは答えの出ない疑問だけだ。

自失呆然と立ち尽くしていたアーリウスは、しばらくしてゼロヒトから抱き寄せたディアナを見下ろした。アーリウスの目から自然と流れ出た一滴の涙が少女の白い顎を伝って零れ落ちる。

「ディアナ……」

（お前も、消えてしまうのか……？ ゼロヒトのように、俺の前から……。）

穏やかな表情をして瞼を閉じた少女の顔は、初めて会った頃と見違えていた。

そこに、金色の光が風に乗って流されてきた。

「あ」と、声にならない声がアーリウスの口から漏れる。

シャークウッドがそれに反応して振り返ると、ディアナの透き通った瞳がまっすぐにアーリウスへと向けられていた。

「アース……私、ちゃんと役立てた……？」

弱弱しく掠れてはいたが、しっかりとした口調で言った。

ディアナは大粒の涙を流し、震えながらアーリウスの胸の中で鳴

咽を堪えた。アーリウスが安堵した様子で少女の体をやさしく引き寄せると、彼女が落ち着くのを待った。

地平線に姿を現した太陽を眩しそうに見つめたシャークイッドが切り立った崖から下を見下ろしたまま零した。

「隊長。ゼロヒトは、いったい何を伝えたかったんすかね……」

シャークイッドの問いに、アーリウスはディアナを見つめて答えた。

「ゼロヒトも、俺たちを傷つけたかったわけじゃないってことだろ。きつと、本当は裏切りたくなかったのかもしれない」

命を散らした人々を弔う長い沈黙のあと、高いところへと昇っていく太陽を見つめていたが、そのうち三人はゆっくりと丘を下った。

## エピソード

バーベキューをしようと言ったのは、いったい誰だったのか。

アーリウスは丘の上に大きな荷物を置くと、ため息をついてしゃがみ込んだ。後から登ってきたシャークイッドが運んできた廃材を使つて、簡易の日除けを作る。更に後から前髪を汗で額に貼り付けたトウも現れた。男三人の淡々とした淀みない流れ作業のおかげで、バーベキューに必要なだけの準備が整った。

天候は良好。風速も平常に比べて穏やか。いかにもアウトドア日和である。

「はー、やっとついたあー！」

周りの準備が整つてから少しして、遠足にやってきた子供のようニコニコしながらハナグサが現れた。その後から好奇心一杯に周囲を見渡すディアナ、そしてヨセウ、マリスと続いた。

ハナグサはいかにも楽しそうに蒸留水で手を洗い、ハンカチで拭いながら早く手を洗うようにすすめた。

「きれいで冷たい水はまだまだあるんだから、ちゃっちゃんと手を洗いなさいよ！」

ストレッチして体をほぐしながら、その言葉に男性陣は一樣に顔をしかめる。

（その水をここまで運んできたのは俺達だつての！）

内なる本音は奥底におもりを付けて沈め、早速手を洗いに向かった。

「マリス、大丈夫？」

「うん、平気。ヨセウ」

新調した帽子を風に飛ばされないう片手で押さえながら、ヨセウが頬を上気させたマリスを気遣って言葉を掛けていた。

アーリウスが気づいた時には、すでにマイ包丁を片手に持ったハナグサがただならぬオーラを背にまとい、食材を取り出していた。普通の人間ならば近づけない彼女のアシスタントについたのは、唯一耐性のあるトウだ。

「ハナグサ。生ゴミは、これ」

静かに発声するトウの言葉が、不思議なことにハナグサの周りを小さいお花畑に変えてしまう。さらには、少しでもトウがハナグサに触れてしまえば、彼女の顔は火を噴いたように赤くなった。その様子を、アーリウスは薄い笑みさえ浮かべて眺めた。

「そっぴや、本来の目的を忘れてたな」

アーリウスはおもむろに立ち上がると、伸びをした状態で少し離れた場所を目指した。

ここは風通しの良い、つらい記憶の残る場所だった。けれど今は違う。以前のように周りが黄砂に埋もれているだけでない。肌で感じられる生命の息吹があたりを満たしていた。

「ずいぶん、変わったな」

辺りを注意深く見渡して、アーリウスは関心のため息をついた。

「へへ、かなり苦労したんすよ」

墓標の前に膝をついたシャークウィッドが、自慢げに胸を張った。何もなかった黄砂の砂漠に、埋もれるようにして伸びる細い線。シャークウィッドが悪戦苦闘しながらも、日参して何キロも離れた場所から水が引いてきたパイプの影だった。

「でも、そろそろ日参するのは無理っすね」

「どうして……？」

「わかったんす、アイツが……ゼロヒトが何を言いたかったのか。アイツのために、何も無い所に何かを与えようとしてきて、初めて植物の芽が土から顔を出したとき、感じたんすよ」

シャークウィッドが顔を俯けて鼻水をすすり上げた。アーリウスもそんな彼に何がわかったのかは聞かなかった。

戦闘機と使い手は、薄い絆で繋がっているわけではないのだ。トウやマリス、そしてディアナとの絆がそうであるように、ずっとずっと強い繋がりがあるのだと思う。

風に乗ってきた香ばしい香りに鼻をくすぐられ、近づいてきた賑やかな声に二人は振り返った。

「ほーら、ハナグサさま特製のソーセージも焼いたわよっ！」

大皿いっぱい盛られたソーセージやローストビーフが、トウの運んできたちゃぶ台に乗せられた。

緑の絨毯の上に胡座をかいて最高の仲間と笑い、語らいながら食べる昼食は最高だった。

f  
i  
n  
.  
.  
.

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0606s/>

---

ジェニユイン・ミラクル～真の奇跡～

2011年5月4日07時56分発行